

《読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》

読書活動への扉を開く！

桑村小学校 令和4年6月17日 文責 渡邊

6月16日(木)に、学校図書館司書の小谷先生と「マルベリー」の皆さんによる読み聞かせがありました。



読み聞かせをしていただいた図書は、第1学年『たなばたさま』、第2学年『こわいものがこないわけ』、第3学年『うそつくかわうそのむかしばなし』、第4学年『水のミーシャ』、第5学年『ぼくのニセモノをつくるには』、そして第6学年は『蜘蛛の糸』です。

第6学年児童の読み聞かせは、鈴木薫さんが「ブラックパネルシアター」用のシアターに、手作りのパネルを貼りながら読み聞かせを行いました。



全ての学年の子供たちは、みんな楽しそうにお話を聴いている姿が見られました。それぞれの学年の発達段階に合わせて選書することは容易なことではありません。お忙しい中、本当にありがたく思います。

鈴木さんが紹介してくださった『蜘蛛の糸』は、「ブラックパネルシアター」として、会場を暗くしてブラックライトを当てるとパネルが浮かび上がって見えるそうです。幻想的な世界が体感できそうですね。

さて、保護者の皆様方から寄せられた声を紹介させていただきます。

わたしは幼稚園で読み聞かせサークルに入っているのですが、よく読み聞かせをしているのですが、家で練習している時、借りてきた絵本を楽しそうに読む我が子の姿を見かけます。幼稚園児と小学生では、感性もまた違っていて、たとえば動物が出てくるお話を読んだとき、「動物園で見たよ」「知ってるよ」と話してくるのが幼稚園児で、「この動物は〇〇に住んでる」「大きさは〇〇ぐらい」と話してくるのが小学生です。同じ本を読んでも感じ方や考え方、想像力はこんなに違うのだと思います。小学校で読み聞かせをしているとき、ただ何となく聞いている子、ちゃんと聞いている子すぐ分かります。本に興味をもつ子が増えることを願うばかりです。(5年生保護者)

毎回の『読書活動への扉を開く』を読ませていただき、校長先生の読書に対する熱意はすばらしいなと尊敬します。私自身も読書が好きで、子供たちと図書館に行くたび、自分の本も1～2冊借りています。毎日忙しいですが、少しでも本を読む時間を作り、子供たちと一緒に読書を楽しんでいます。校長先生のお便りに感化され、私ももっとたくさんの本を読みたいと思いました。これからも『読書活動への扉を開く』を楽しみにしています。(6年生保護者)

私は本を読んでいるときに気をつけるようにしていることがあります。同じ本を何回か読んで、しっかりと聞いてもらうことや、分からない言葉があったらそのままにしないで、すぐに子供と一緒に調べることです。本から得た情報を言葉から、昨日より今日の会話がよりよい内容として影響していることは日々実感しています。(6年生保護者)

物事を「やばい」の一言で済ませてしまうのは、それが仲間言葉であったり、使っている自分がかっこいいと感じるからなのではと思っています。大きくなるにつれ、仲間の中の自分も大切だと思いますが、言い回しの難しい本などは読むのにも訓練が必要なので、それとこれとは別に鍛えていって欲しいと思います。(1年生保護者)

高学年になるにつれ、一緒に読書というのが難しくなるのだとみなさんの感想から感じました。大きくなった子供とコミュニケーションを図る手段として聞いたことのあるのは、「交換日記」をするというものでした。日々あったことのみではなく、新たな発見や疑問などを親子で共有するのです。手間と時間がかかるけれど、効果は大きいかもしれませんね。(1年生保護者)

保護者の皆様方には、たくさんの感想や意見を寄せていただきとても嬉しく思います。これからも、学校、家庭、地域社会とが連携し、読書活動を推進していきたいと考えます。よろしく申し上げます。